活動報告

鳴門教育大学国際教育協力研究　第16号，133－137，2022

2022年８月シンガポール視察・交流に関する報告

Report on the August 2022 Visit and Exchange in Singapore

石坂広樹，小澤大成，井上省吾，貝畑健太，石原優人
Hiroki ISHIZAKA, Hiroaki OZAWA, Shogo INOUE, Kenta KAIHATA, Yuto ISHIHARA

鳴門教育大学
Naruto University of Education

１．訪問目的・日程

鳴門教育大学の令和４年度グローバル教員養成プログラム「グローバルレッスンスタディ＜シンガポール共和国＞」では，シンガポールの小学校を訪問し，現地にて理数科に係る授業研究・交流活動を通じて，学生のグローバル教員化を目指した．また，シンガポールの教育事情に関する調査をすることで学生の比較教育における研究力を向上させることも意図した．同プログラムの日程は以下の通りである．

表１．プログラムの日程

８月８日	ナンヤン工科大学国立教育学院（NIE）にて出張日程調整・協議
８月９日	シンガポール市街地にて教科書･教材の調査･購入
８月10日	ナンヤン工科大学国立教育学院（NIE）にて研究発表・研究交流
８月11日	Primary School A　訪問・授業観察・交流 Primary School B　訪問・授業観察・交流
８月12日	シンガポール教師アカデミー（AST）訪問･交流 Primary School C　訪問・交流 Primary School D　訪問・交流

２．ナンヤン工科大学国立教育学院（NIE）での交流

８月８日に，ナンヤン工科大学国立教育学院（NIE）では，NIEの数学・数学教育学科，理科・理科教育学科の教員６名，鳴門教育大学の教員２名・学生３名，京都女子大学教員１名・九州ルーテル学院大学教員１名の参加を得て，グローバルレッスンスタディ（GLS）に関する研究報告を行い，意見交換を行った．

研究報告では，GLSの定義，成り立ち，これまで実践してきたGLS下の授業検討会や授業観察などを説明し，GLSの成果についても，これまで出版されてきている関連する論文の内容を中心に紹介を行った．報告した内容の概要は以下の通り．

⑴　GLSは，異なる国の教師の授業研究に係る異文化間能力（intercultural competence）を育成することを目的としている．GLSの開発にあたっては，算数の授業を対象とし，日本とシンガポールの小学校教員間での国際交流（授業研究）をオンラインベースで執り行った．

⑵　GLSによって，小学校の教師の①授業研究に係る異文化間能力と②教科指導能力の向上を成果として期待した．

⑶　本研究の結果，GLSを通じて異なる国（文化）の教師との交流を通じてのみ可能となった新しい授業が企画・実施することができた．授業の事前・事後検討中（オンライン交流）に得られた議事の分析，実施された授業の展開の分析によって，授業研究に係る異文化間能力や算数の教科指導能力の向上にGLSが貢献することが確認された．

NIEの教員側との意見交換の中で，GLSの実施形態であるオンライン下での授業検討や協議が，コロナ禍であっても実施可能な教員研修の１つとして魅力のあるものであり，今後の継続的な実施・参画，理数科だけでなく他教科への展開の可能性，幅広いアクターのオブザーバー参加など，具体的な提案を得ることができた．

３．学校訪問・授業観察について

８月11日・12日に４校の小学校を訪問し，そのうち２校で合計３クラスの授業（算数２クラス，英語１クラス）を観察した．どの授業においても子どもたち

は意欲的に学習に励んでおり，また教師もICT機器を用いながら情熱をもって指導に当たっている姿が印象的であった．

3.1. 算数の授業観察

Primary School Aでは，4年生の「お金」に関する算数の授業を観察した．子ども達は，10セントと20セントと50セントを使って1ドルを作るという問題に取り組んでいた．1ドルを作るにはいろいろなパターンが考えられる．例えば，50セント2枚，10セント5枚と50セント1枚，10セント1枚と20セント2枚と50セントが1枚などの組み合わせがある．子ども達は，ペアになって配られた教材を使いながらいろいろなパターンを考え，ワークシートに記入していた（図1・2）．ペア活動の後は，前に出て自分たちの学習成果を全体に発表した．そこから発展した内容として，次の問題では2.4ドルを10セントと20セントと50セントと1ドルを使って作るという問題に取り組んでいた．

日本には「お金」という単元がないため新鮮な気持ちで授業観察した．日本の算数の授業においてもお金という形ではなく違う形で授業に取り入れることで，子ども達の思考力を高めることができ計算力も身に付くのではないかと感じた．また，世界的には算数のカリキュラムの中に「お金」という単元が存在する国は多い．シンガポール以外の国でもどのようにこの単元を指導しているのか，関心が高まった．

Primary School Bでは，3年生の分数の学習を観察した．この授業では子どもたちは分数の大きさ（3分の5，3分の10，5分の8）を比べる活動をしていた．初めに前時の復習が行われ，実際に分数の大きさを比べる活動に入っていった．分数の大きさを考える際には，ワークシート（図3）に自分の考えをまとめてからペア学習に取り組んでいた．解答を見ると，通分して分母の数を揃えたり，図を描いたりすることで分数の大きさを比較していた．中には，分母ではなく分子の数の大きさを揃えることで分数の大きさを理解しようとする子どももいた．こういった考えは日本の算数では教えない方法であるため驚きを感じた．そして，個人やペアで答えを考えた後には，クラス全体で考えを共有する時間が設けられていた．

図1．配布された教材とペアワークの様子．

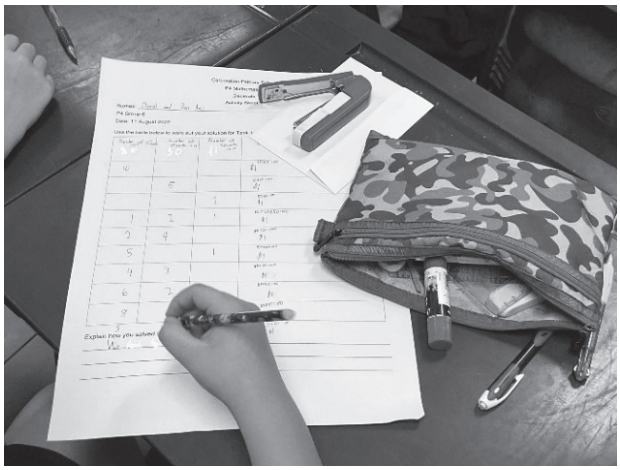

図2．ワークシート．

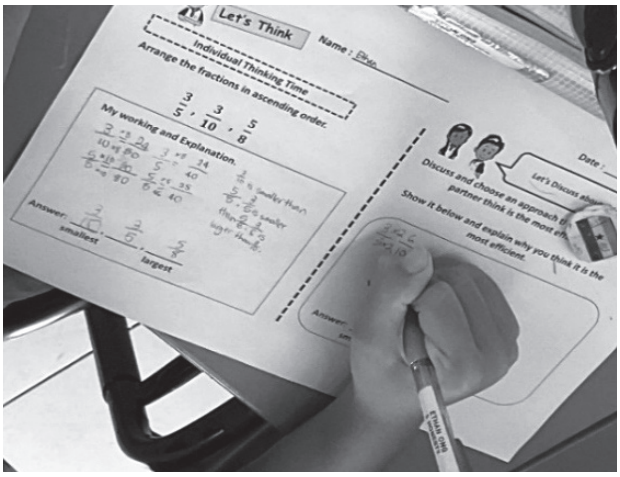

図3．分数の授業のワークシート．

授業観察を行ったのは短時間であったが日本の算数の授業との共通点や相違点について感じることができた．共通点としては，ペアで考えたり個人で考えたりする時間が確保され，その後に全体での交流があることである．2校目の算数の授業においては，ペアやグループで話し合いをするときに，どのようなことに気をつけて話し合いをすればよいかということを教師が子ども達に示しているのが印象的であった（図4）．これは，日本の授業でも頻繁に行われていることである．

相違点としては，次の2つのことが挙げられる．1つ目は，教師はあまり板書をしないということである．

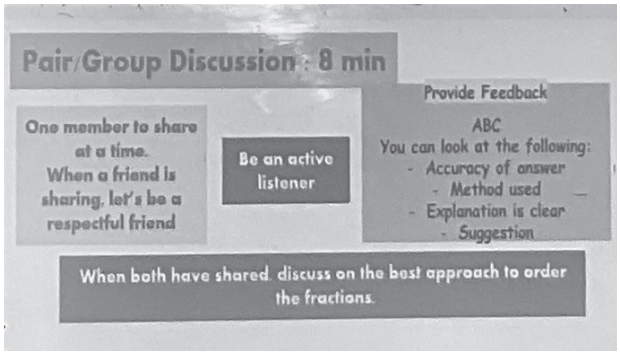

図４．ペアワークにおける注意点の授業スライド．

どちらの授業も教師が子ども達に示したいことは，スライドを使って示しホワイトボードにあまり書くことがなかった．2 つ目は，ノートや教科書を使わないことである．たまたま見学した授業でしようとしなかったのかどうかは分からないが，どちらの授業においても子ども達の机の上に教科書が出されていなかった．またノートを書くということもなかった．

3.2. 英語の授業観察

Primary School A で，6 年生の Oral Stimulus-Based Conversation（Oral SBC）に向けた会話をテーマとした英語の授業を観察した．Oral SBC とは小学校卒業の際に受験する全国統一テスト（Primary School Leaving Examination : PSLE）内の英語口頭試験で，学生の発音やアクセント，自分の考えや気持ちをはっきりと正確に表現する力などを評価することを目的に実施されている．

見学した Foundation Class（基礎クラス）には，英語を母語としない学生が多く所属している．最初の段階では Worm-up の活動（図 5）や英語で自分の意見を述べる活動の際に消極的な姿勢をとる学生も見られたが，その後の発表の様子からは子どもたちが与えられたトピックに対して真剣に取り組む様子を感じることができた．授業の中で最も興味深かったものは，SEP（State-Elaborate-Personal Experience）を使って友人の発表を評価するといった活動である．発表の質を上げていくために，リスニングで発表内容を聞きチェックリスト（図 6）を基に評価を行ったり，5W1H を使って質問したりしていた．日本でも子ども同士で発表を聞き評価する活動は一般的であるが，それを次の活動に生かそうとする内容は見たことがない．非常に参考になる内容であった．

図５．Worm-up の様子．

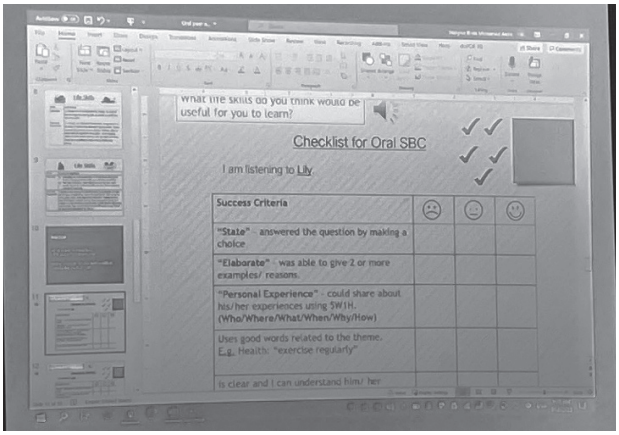

図６．発表の評価チェックリスト．

3.3. 学校の多文化共生への取組

シンガポールでは 1965 年の建国以来 50 年以上にわたって「多民族・多文化政策」が進められてきた．学校教育の中でも移民の存在を積極的に位置づけ，異文化教育を積極的に実施している．例えば，シンガポールは中華系民族をはじめとした多くの民族が生活を行っている多民族国家であるが，国民が共通で使用できる言語として英語を公用語と設定し，それを教育政策や文化政策に用いてきた．1984 年以降，学校の教授言語は英語に統一されているが，中国語やマレー語，タミル語等も第二言語として学習することができる．

中等教育における社会科での取組から教育における多文化共生の取組の例を挙げると，シンガポール教育省（Ministry of Education, Singapore）が示す教科書 Secondary 1A では，その大きな目的として Living in Multicultural Society（多文化社会の中で生活すること）と設定されている．シンガポールのような多文化社会で暮らすことは，互いの文化を学び，理解する機会を与えてくれるが，その一方で，異なる文化を理解し尊重しなければ，緊張や誤解が生じることがある．この教科書では，シンガポール人のアイデンティティの貴重な一部である多文化主義を発見し，調和の重要性を理解する内容となっている．教科書で取り扱う内容は，①私のアイデンティティは文化によってどのように形成されているのか，②多文化社会で暮らすこと

の経験や影響とは，③どうしたらシンガポールで共に調和して生きることを学べるかの３点から構成されている．他にも様々な課題設定がなされ，学生が問いに答えることやディスカッションなどが想定されている内容であった．

このような社会科の教科書を通して，シンガポール市民は社会や自分の住む世界についてより深く理解し，様々な価値観や文化を受容する能力を獲得していると考えた．まさに，シンガポール政府が進めている「多民族・多文化政策」を教科書を通して感じることができた．また，日本の教科書とシンガポールの教科書を比較することでそれぞれの特徴が明らかになり，新たな視点を身につけることができた．

学校の施設を見ると，私たちが訪問した学校の一つはキリスト教系の学校であったが，仏教やイスラム教などの宗教を信じる生徒も存在しており，そういったことは当たり前のことであると聞いた．そのため，食堂で提供される給食が宗教により異なるなど，学校現場でも細かな配慮が行われていることがわかった．

私たちが確認できたシンガポールの学校教育における多文化共生への取り組みの他にも，実際の学校現場では様々な配慮がなされていると推測している．こうした取り組みを日本の教育現場でも用いることができないか検討し，実施していくことが多文化共生を推し進めていくには必要だろう．

４．シンガポール教師アカデミー（AST）訪問について

4.1. シンガポールの教員養成システム

今回の訪問を通して多くの学校の先生と交流を行った．そこで感じたことは教師の教育に対する責任感や専門性の高さである．これにはシンガポールの教員の社会的な地位の高さや教員養成システムが影響を与えているのではないかと考えた．

シンガポールでは全員が同じスタートラインに立ち教員としてのキャリアをスタートする．その後，３つのコース（図７）のうちから１つ選択して自らの専門性を高めながらキャリアを積み重ねていくこととなる．３つのコースとは，教師としての専門性を高め，教室にとどまり，同僚を指導し，教育法の専門家として活躍することを目指す教師を目指す the teaching track，学校の指導者や教育省での指導的役割を目指す人向けの the leadership track，特定の分野の知識を身につけるための the specialist track である．

これらのコースを選択した後，教師は自動的に次の

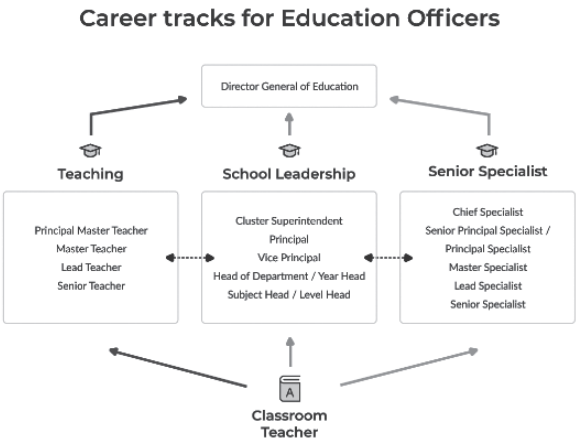

図７．教育関係者のキャリアトラック．
（出典：シンガポール教育省 HP[1]）．

レベルに昇格していくのではない．シンガポールの教師はキャリアアップするために，教師は定期的に評価され，自らの現在の能力と次のポジションでの可能性を示していく必要がある．教員評価には，教師とスクールリーダーが面談し年間目標が達成できたかどうかを話し合う総括評価，業績管理システム（EPMS：Enhanced Performance Management System）が導入されている．

シンガポール教師アカデミー（Academy of Singapore Teachers：AST）は，教員研修を担う機関であるとともに，AST 所属の「教師の教師」といわれている master teacher が，学校に赴き，指導・アドバイスを行うという機能を持っている．彼らは自らが教育に関する高い専門性を持つだけでなく，他の教師のメンターとして高い成果を発揮できるようにサポートを行っている．筆者は，８月 12 日に AST を訪れた際は，master teacher の方々と交流を行った（図８）．

図８．AST での Master Teacher との交流．

[1] Singapore Ministry of Education. *Professional Development and Career Tracks*. Retrieved August 25, 2022, from https://www.moe.gov.sg/careers/become-teachers/pri-sec-jc-ci/professional-development

4.2. 授業研究に関する交流内容

ASTでは，日本とシンガポールの教育についての意見交換を行うために，シンガポールの日本の授業研究についての発表を行った．発表した内容は下記の通りである．

① 小学校における一般的な研究推進委員会の構成について

一般的に日本の小学校では，研究推進委員会には校長，教頭，研究主任，研究推進委員の先生が所属しており，研究推進委員の先生はそれぞれの学年（1年～6年）の中から選ばれる．

② 研究授業を行う意義

授業研究を行うことで，教員間のチーム力の向上や教師としての資質の向上が期待され，それは学校全体の向上に繋がる．

③ 1年間の授業研究の取り組み

日本の授業研究は1年間を通して，Plan, Do, Check, Actionのサイクルで行われている．この取り組みは1年で終わりではなく，その年の成果や課題を活かして次の年に繋がっていく．

④ 指導案の書き方

指導案では，単元全体に関する内容と本時の授業に関する内容を記載する．単元全体については，単元の目標，児童の実態，指導方法，単元での評価に仕方などを，本時については，本時の目標，児童の活動，指導上の留意点，板書計画などを書く．

⑤ 算数の教材を作るときのポイント

児童がその授業で問題と出会ったとき，「なぜ？」「どうして？」と感じることができる教材だと主体的に取り組むことができる．そのためには次のようなギャップが生まれると児童は主体的に取り組むと考えられる．友達の考えとのギャップ，教科書と児童とのギャップ，児童の経験とのギャップ，児童の感覚とのギャップ，既習事項とのギャップなどである．

⑥ 事後検討会について

授業が行われた後に事後検討会が行われる．その会議では，その授業について学校の先生全員で振り返り，良かったところや改善点などについて話し合いこれからの授業に活かしていく．

5．総括（大学教員の立場から）

今回のプログラムによって，コロナ禍で中断していたGLSの活動を再開するための協議を，NIEや協力関係にある小学校，さらには新たに訪問した小学校と行うことができ，今後のGLS活動の発展が期待できた．これまでは，GLS活動の中心は，交流を行う小学校の教師たちであったが，今回のNIE，AST，小学校との意見交換を通じて，大学教員，教職課程の学生，master-teacherなど，様々なステークフォルダーの参加を得て行うという新しい展開が提案された．今後，その具体化に向けて準備を進めることとしたい．

今回のプログラムに参加した学生は，上述の通り，日本における教育実践とシンガポールにおける教育実践の違いや共通点について気づきを得られ，その発見を日本の学校現場でどう活用できるのかについて模索している様子が見て取れた．シンガポールにおける授業研究の実践を知り，自分自身の教育実践の振り返りができることができ，とても有意義な時間となったとの感想や，改めて日本の授業研究が計画的に組織的に行われていることに気付き，これからの教育活動に繋げたいとの希望も学生から寄せられたところ，彼らの今後の研究・実践活動に期待したい．